四江会の内緒の分科会

2019 年 5 月 31 日

藤田 早苗

私たちは敗戦後の昭和２１年４月熊本中学へ入学した。戦災で焼けてしまった校舎に代わり、１６部隊の兵舎が教室である。新入生の中に、出身小学校は違っていても、入学以前にお互いを見知っている生徒たちがいた。

戦後の荒廃した焼け跡ばかりの日本は科学立国で復興を目指していた。その一環として、科学知識を身に着けた人材を育てようと熊本市内の各小学校の六年生から１~２名を選び「科学班」が編成された。メンバーの多くは熊本中学に進学した。たまたま私はその一員だった。「選ばれた」という意識があって、「科学班」を表出させるのに気が引けていたが、７5 年近くも前の出来事で、泉下の客も増えてきた。故人を偲び、老境に入った私たちの記憶を呼び戻し元気づけるため回想記を呈することにした。

開催することもなかった四江会の内緒の分科会「理窓会」を紹介する。

週一回のペースで男子付属小に４０人ほどが集まった。男子付属の先生方が指導に当たられたようだ。後で思えば先生方も指導方針に戸惑いがあったようで、どんなことを教わったか全く覚えていない。いち早く代数を教わったようで鶴亀算は楽になった。

吉永公祐君が「起立、礼」などの級長の役目を負っていた。上熊本の市電停留所から男子付属へ向かう坂道を高田登君と連れ立って通った。

動力で動く船を作ることになり、私はアルコールランプでボイラーを沸かし、その蒸気でタービンを廻しスクリュウでの推進を期したが、動く筈もない。半田付けをやったのも始めてだった。それぞれ動力源を考えたようだが、一番の出来は清永総理君のゼンマイによる高速船だった。付属校のプールを滑らかに走った。当時、ゼンマイオモチャなど縁遠いものだったが、清永君は保存していたのだろう。作りかけの船を実験すべく

帰途、我が家の小さな泉水で高田登君や水洗節哉君と遊んだ記憶もある。各校の代表で来ていた故か鼻息も荒く、帰り道、「慶徳校の上妻を知らないか」と啖呵を切った上妻君と花園校の鳥飼君との大立ち回りもあった。

小学校卒業時、科学班も終わりとなり、同窓会の名前を付けることになった。高千穂正史君の提案は「博士クラブ」だったいう微かな記憶がある。私の提案の「理窓会」が運よく採用されたが実際の会合はなかった。そして「理窓会」のネーミングもすっかり忘れてしまった。卒業後、かなり経った何かの集まりで、突然「理窓会」のネーミングを上妻満君が思いだした。

吉永公祐君からの便りの中に、高千穂正史君の夕刊囲み記事の切り抜きが添えられていた。高千穂君が存命中の時期である。内容は「科学班で戦時中、手旗信号を教わった」というものだった。私の記憶と違っていたので清永総理君を通じて「科学班は戦後に始まった」と高千穂君に連絡した。早速、思い違いだったとの回答があった。科学班の教室は男子付属校にあったから、高千穂君にとっては同じ校内である。錯覚があったのだろう。

科学班の成果は７５年後の結果に現れている通り、特筆するものは何もない。四江会の集まりを楽しくした一因にはなっていると思う。

終戦直後、先行きの希望と不安のある中、小学校六年生は何を考えていたのだろう。すっかり過ぎ去った昔のことである。